–-

**1９8号**

**大鹿村中央構造線博物館たより**

**TEL:(0265)39-2205**

**2025年11月発行**

**の西端は？**

大鹿村にある中央構造線北川露頭や露頭では、中央構造線を挟んでの岩石と、の岩石が接している様子が見られます。このうち、三波川変成帯という地質帯は、白亜紀後期（およそ1億～6,600万年前）に地下約15km～100kmくらいのところで、低温高圧型の変成作用を受けた岩石が分布しているエリアを指します。そして、三波川変成帯の分布域は、関東山地から中部地方、近畿地方、四国を通って、九州の大分県東部・佐賀関半島まで続いていることが知られています(図1, 写真1)。佐賀関半島より西側では、三波川変成帯の岩石は、地下にもぐってしまって行方不明です。

一方、九州の西端、長崎の半島・野母半島、熊本の天草半島には、三波川変成帯と同じ白亜紀に低温高圧型の変成作用を受けた岩石が分布しているエリアがあり、これらを総称して長崎変成岩といいます(図1,写真2)。長崎変成岩は、三波川変成帯の岩石と類似性が認められるため、三波川変成帯の延長とする考え方も提起されていました(Miyazaki.et.al, 2016など)。そんな中、2020年に熊本大学等の研究グループが、西彼杵半島の長崎変成岩中からマイクロダイアモンドを発見しました(Nishiyama.et.al, 2020)。マイクロダイアモンドというのは、ミクロン(0.001mm)サイズのダイアモンドのことで、地下120km以深まで沈み込んでから上昇した超高圧変成岩であることを示す鉱物であり、どうやら長崎変成岩は、三波川変成帯の岩石より深いところで超高圧の変成作用を受けてできたらしいことがわかってきたようです。その他の相違点なども鑑みて、長崎変成岩は、三波川変成帯の延長ではなく、独立した変成帯とする考え方が台頭してきています。 (宮崎)



**図1 白亜紀に低温高圧型の変成作用を受けた岩石の分布域**

※産総研シームレス地質図より作成

　

**写真2 長崎変成岩中の泥質片岩**

（撮影地：長崎・西彼杵半島雪浦海岸）

**写真1 三波川変成帯の泥質片岩**

(撮影地：大分・佐賀関港近くの海岸)

